

【葬祭編】

家族・地域を含めた

新たな「つながり」への展望と葬送墓制

ー死の文化の変容と多元化する社会的紐帯の考察ー

はじめに

山田 慎也

本年度は当課題の2年目として、初年度の問題意識をそれぞれの立場から深めていくものである。そして葬送班と墓制班にわかれ、死後行われる葬送儀礼や、墓などの葬儀後の祭祀におけるそれぞれの局面を、歴史的経緯も含めて調査研究を行うことによって、家族や社会の新たな「つながり」の形成を考察するものである。これは、少子高齢化が進展するなかで、人口構造も大きく変容し、家族や結婚のあり方が変わり単身化がすすむ中で、あらたな紐帯が求められているからである。

特に新型コロナウイルスによる肺炎の流行は、従来、小規模化しつつある葬儀のあり方を一気に促進していくといった、急激な変化をもたらす可能性をはらむ状況と言っても過言ではない。故人に寄り添いたい、ゆっくり送りたいと思っても、この感染症によって亡くなった場合には、感染予防の観点から簡単にはできなくなっている。そして今後しばらくは、葬儀に多くの人が集まって儀礼をすることや、葬儀後の会食などが難しい状況が続いていくことが予想される。

こうして思うようにならず、否応なく対応せざるを得ないなかで、どのように社会的なつながりを構築し、維持していくかという問題に、いま改めて直面している。本研究は現代の状況だけでなく、この事態に至る歴史的経緯を踏まえることで、事態の深層を明らかにしていくことも目的としている。このたびの緊急事態を考える上でも、新たなつながりの展望を検討することは喫緊の課題と考える。